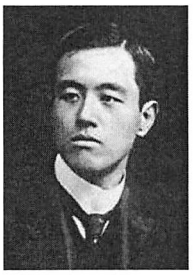
増補　大谷光瑞鏡如上人

矢島嗣久

浄土真宗本願寺派第二十二世門主大谷光瑞鏡如上人は、明治後期から大正初期にかけて、中央アジアの仏教美術関係の九千点に及ぶ多くの文物を収集した探検隊の組織者である。晩年は病気療養のため来別し、当地で遷化（死去）された。

一、光瑞の出生と生い立ち

大谷光瑞は、浄土真宗本願寺派京都西本願寺二十一世法主明如上人大谷光尊の長男として、明治九年（一八七六）十二月二十七日に生まれた。名前は峻麿という。十歳のとき得度（出家）して法名を鏡如、諱を光瑞と称した。鏡如光瑞は西本願寺始祖の准如から数えて十二代目にあたる。



光瑞は明治十九年（一八八六）に東京へ出て学習院に入学した。その後、二十三年には神田の共立学校へも入学したが、軍事教育や校風にあきたらず、それぞれ退校している。

京都へ帰った十五歳の光瑞は、民家を借りて勉学生活を送ることになる。内外の古典や宗典、書道、歌道の師は、時間を決めて交替で通って来た。

明治二十四年（一八九一）、光瑞は十六歳のとき大谷本廟の中へ移され、足利義山、前田慧雲らの碩学に教えを受けた。光瑞はその後ほとんど独学で、歴史、地理、植物、農学、工学、地質学、天文気象、海洋学等、驚くべき多岐にわたる学問を身につけた。彼は教典研究のため漢文にも親しんだ。また、梵語を極め、英語とドイツ語もマスターした。

明治三十一年（一八九八）一月、二十二歳になった光瑞は侯爵九条道孝の娘籌子を妻に迎えた。籌子は明治二十五年（一八九二）に十一歳の少女で西本願寺へ入與し、十七歳になって正式に光瑞と結婚式を挙げた。籌子は後の貞明皇后（節子、大正天皇の皇后）の姉にあたる。

明治四十年（一九〇七）、大谷光瑞の妻籌子の弟九条良致男爵に光瑞の妹武子を嫁がせた。

武子は、西本願寺法主大谷光尊の次女として明治二十年（一八八七）に生まれた。九条武子は佐々木信綱に師事した歌人で、歌集「金鈴」、「薫染」、歌文集「無憂華」などがある。歌道の友人に柳原燁子（白蓮）がいる。

二、大谷探検隊

大谷光瑞の初めての外遊は、明治三十年（一八九九）一月から五月にかけて行われた清国（現中国）巡遊だった。この旅で漢口（現武漢市）から北京まで、一千キロを越える大陸縦断を二十二日間かけて踏破した。当時、光瑞は二十二歳。

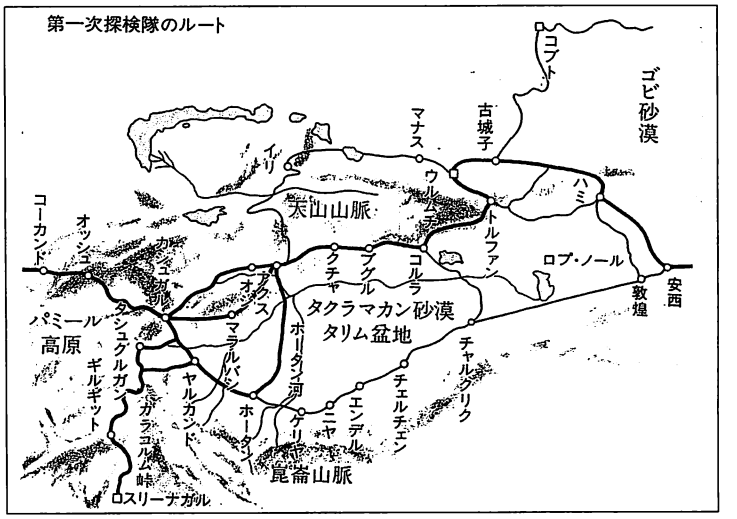
彼は同年十二月、再び外国旅行に出かけた。インドからヨーロッパ各地を廻り、ロンドンに三、四年間遊学する予定である。

スエーデンの地理学者、スヴェン・ヘディンやハンガリー人でイギリスに帰化した探検家のオーレル・スタインら世界各国の中央アジア探検の活躍は、光瑞の西域（現中国西部）探検を決意させる動機となった。彼にとって西域こそは、かつて仏教が東漸した重要な地域であり、この地方を探検して古代の教典を収集することはアジア人としての夢だった。

明治三十五年（一九〇二）、光瑞は父光尊の病状が悪化したのを機に、日本への帰路を利用し中央アジア探検隊（第一次）を組織した。光瑞の一行五名が、八月中旬にロンドンを出発し、ロシア領を経由して西域を目指した。当時、光瑞は二十七歳、一行は光瑞率いる渡邊哲信、二十九歳、堀賢雄、二十三歳、本多恵隆、二十七歳、井上弘円、三十一歳、らの四名は本願寺末寺の若者達である。

探検隊の一行はカスピ海を横断後、サマルカンド（現ウズベスキタン共和国）を経てオシュ（現キルギス共和国、中央西部）に着いた。

海抜三八〇〇メートルのテレク嶺を越えて、九月には清国領新疆省カシュガル（現中国、カシ、タクラマカン砂漠西北側）に入り、タシュクルガンに到着する。タシュクルガンはパミール高原の東部に位置する。



大谷探検隊と本多恵隆　本多隆成著より

同年十月中旬、光瑞は隊を二つに分け、本多恵隆、井上弘円の二名を従えインド領へ入り、海抜四六五〇メートルのミンタカ嶺（峠）を越えて、各地の仏跡を歴訪した。ミンタカ峠は北側のタシュクルガンと南側のギルギットの中間に位置する。

翌明治三十六年一月、光瑞はインド東方のカルカッタで父明如門主光尊（五十四歳）の死を知り、探検行を中止して日本に帰った。二十八歳の鏡如上人大谷光瑞は、二十二世法主西本願寺住持を継職して、同時に本願寺管長となる。

タシュクルガンで光瑞と分かれた渡邊哲信、堀賢雄の二名は、ヤルカンド（現ソーチョ）、コータン、クチャ地域を探検して多くの出土品を得た。ヤルカンドはタクラマカン砂漠の西端にあり、カシュガルの東南側に位置する。コータンはタクラマカン砂漠の南西側、クンルン山脈の北西側に位置する。クチャは北側のテンシャン山脈と南側のタリム盆地の間に位置している。

渡邊と堀の二名は、帰途天山山脈東方のウルムチ、トゥルファン盆地東方のハミを経て甘粛省（現カンスー）に入り、翌年の二月末、西安（旧長安）に達した。

光瑞、籌子夫妻は、明治三十九年（一九〇六）九月末、清国からインド、ヨーロッパ各地を回り、ロンドンに三ヵ月間滞在して明治四十三年（一九一〇）十月に帰国した。

第二次大谷探検隊は、橘瑞超、野村栄三郎の二名が明治四十一年（一九〇八）六月に北京を出発して西域へ向った。二人は外蒙古のクーロン（現ウランバートル）、ハタットを経て十月下旬、新疆のウルムチに到着後、トルファン、楼蘭、クチャ、コータンなどを探検した。

第三次探検隊は、明治四十三年（一九一〇）八月に橘瑞超がロンドンを出発して、十月に再び西域のウルムチ（天山山脈の東方、トゥルファン盆地の北方）へ達する。

光瑞の妻籌子は明治四十四年一月、三十一歳で風邪をこじらせて死去した。光瑞は子宝に恵まれなかった。

同年五月頃、橘瑞超が音信不通となる。光瑞は六月、吉川小一郎を西域へ向けて出発させた。吉川は上海、西安を経て十月初旬敦煌へ到着し、待つこと三ヶ月余り、翌明治四十五年一月、橘瑞超と感動的な対面をする。

敦煌はアルチン山脈の東北に位置している。西側にはロブ湖や楼蘭がある。

橘瑞超は辛亥革命を避けてシベリヤ鉄道で帰国した。辛亥革命は一九一一年から一九一二年にかけて勃発した中国で

の革命である。

橘と分かれた吉川小一郎は同年五月、新疆からトルファンに到着して、多くの出土品を手に入れた。新疆は中国の西側にある自治区、トルファンは新疆ウィグル自治区の中、トルファン盆地の中央に位置する。

大正三年（一九一四）一月、吉川小一郎はトルファン盆地を東側に迂回し、トルファン、ハミ、敦煌を経て長城外のアラシャン山脈の南麓を東行する。彼はゴビ砂漠からオルドス地帯の包頭を経て、北京の北西にある張家口に到着し、五月中旬北京に出て帰国した。

三、引退後の光瑞師

大谷光瑞鏡如上人は、大正三年（一九一四）五月、本願寺財団疑惑事件のため、三十九歳で西本願寺住職と真宗本願寺派管長を辞任、伯爵を辞退した。

事件の真相は、西本願寺の財政破綻のため幹部が金策を誤ったことによる。

膨大な赤字の原因は、日露戦争（明治三十七・八年）に本願寺として軍事献納、軍隊慰問、前戦布教、遺族救済などに全面協力したことが一番大きかった。また数次にわたる大谷探検隊の派遣、明治四十三年（一九一〇）には神戸の六甲山麓にケーブルカー付きの別荘二楽荘や、その近くに武庫中学（現尼崎市）を建てたことなどが主なものである。

二楽荘は明治四十二年（一九〇九）に建設され、数年後には閉鎖された。その後、昭和七年（一九三二）に焼失した。

光瑞鏡如上人は、大正三年五月三十日に隠居し、六月二日、弟光明の長男四歳の照が伯爵を継いだ。

光瑞は、神戸六甲の別荘二楽荘の家具・古美術品等を競売にかけて整理を行い、外遊の途についた。その後の光瑞は海外生活が多く、中国上海に住居を構え、中国、南洋のジャワ（現インドネシア）、トルコ等で事業を経営した。彼は大正三年の辞任以後三年間も日本の土を踏んでいなかった。

大正六年（一九一七）十一月、満州（現中国東北部）から台湾に渡った光瑞は、翌七年一月三日、台北を発って九州門司に入港、五月門司を出発して大分県別府の鉄輪貝島別邸に入った。ここで宗門関係者の集会があり、光瑞鏡如上人を中心として「光寿会」を組織することが決った。光寿会は梵語の経典を日本語に翻訳するための機関であるが、光瑞師の講

演会の開催も計画されていた。

光瑞師は同年一月十日に別府を出発して、長崎から乗船し香港に向った。

明治四十二年、光瑞の妹武子が九条良致と結婚した。良致の姉籌子は大谷光瑞の妻である。良致の妹節子は大正天皇の皇后（貞明皇后）、その妹紘子は光瑞の弟光明夫人である。

武子は明治四十二年（一九〇九）、公爵家出身の九条良致と結婚後、夫とともにロンドンへ同行した。夫良致は正金銀行勤務でケンブリッジ大学にも留学した。武子は一年半後単身日本に帰国した。その後十数年間別居生活が続いたが、夫良致が帰国して夫婦は同居することができた。

大正十年（一九二一）一月下旬、光瑞の妹九条武子が別府の柳原燁子（白蓮）を訪れている。別府の上人ヶ浜公園には九条武子の歌碑がある。

やわらかき　湯気に身をおく
　われもよし
今宵おぼろの　月影もよし
　武子

昭和二年（一九二七）五月二十六日、大谷光瑞上人が広島光寿会支部発会式に臨み、「他力安心の極致」について講演を行った。

翌日の二十七日には、光瑞が大分県別府市を訪れ、別府光寿会支部発会式に臨み、前日の広島と同様の講演を行う。二十八日には門司を出発して、上海に向った。

昭和二年十月二十日、嗣法光照伯爵（当時十七歳）が成年を迎えて、真宗本願寺派本願寺住職ならびに管長（一宗一派を管轄する長）に就任した。光瑞鏡如上人の退職以来、十三年間空位だった門主の座が満たされた。

十一月、光瑞は満州（現中国東北部）南西部の大連（現ターリエン）に向う。当時、光瑞の年齢は五十二歳だった。

光瑞の妹、九条武子は風邪を引いて敗血症を起こし、昭和三年二月七日に死去した。享年四十二歳である。

昭和七年（一九三二）四月二十九日、白川義則陸軍大将軍司令官、重光葵公使らが上海の天長節（天皇誕生日）式場で投弾され負傷する。

光瑞は現地に少し遅れてきた。彼は車に乗るときも、一番でなければ氣が済まない性格である。人々がすでに登壇しているのを見て壇上に上がるのを見合わせた。結果的に彼は災

難を避けることになった。

大谷光瑞師の著作は多く、昭和九年（一九三四）から翌年にかけて発行された「大谷光瑞全集」全十三巻に収められている。

昭和十五年（一九四〇）四月十日、光瑞は神戸発こがね丸にて九州視察の途に上る。翌十一日には別府市で臨時光寿会を開催し、「欧州戦争と我国民の覚悟」について講演を行った。十月三日、内閣参議を拝命する。

昭和十六年の大戦勃発の十二月八日、光瑞上人は東京にいた。この年の五月、彼は健康の不調を覚えて、妹九条武子の建てた東京築地のあそか病院に入院して翌月退院したが、引き続き日本国内で療養に努めていた。

翌年の十七年六月、光瑞は再び発病して、東大病院で診断を受けたところ、膀胱乳嘴腫と病名を告げられた。患部は癌性である。彼は二回に分けて手術を受けた。

昭和十九年十二月、内閣顧問を拝命する。

四、光瑞師と別府市

昭和二十年（一九四五）八月の日本の終戦時、大谷光瑞は満州（中国東北部）の大連にいた。光瑞は中国側に抑留され、十一月、膀胱の腫瘍の悪化と共に満鉄（南満州鉄道）大連病院へ入院した。当時、光瑞は七十歳である。

昭和二十二年二月二十八日、光瑞は大連から乗船して、三月七日、九州佐世保に上陸した。光瑞は佐賀県嬉野町の国立病院に入院して膀胱の手術を受けた。

その後、光瑞は別府亀川国立病院で手当を受ける。三月二十四日、別府から船便にて神戸に上陸、京都大学病院に入院した。五月十二日に京大病院を退院して、再び十三日には別府に向い、亀川の国立病院に入院、別棟特別室で療養する。

国立病院では、小野寺博士（院長）の看護を受け、二か月ほどで退院した。光瑞は、この間、脇 鉄一別府市長を訪問する。

光瑞は別府の温暖な気候と風光明媚な温泉が氣にいっていて、ここを永住の地とするつもりでいた。

光瑞は亀川国立病院を退院後、しばらく新別府の林氏の二階に住み、同年七月別府鉄輪温泉の旅館ときわや（鉄輪風呂本三組、現ヤングセンター駐車場）の離れを借りて住むことになる。しかし、ここは三室しかなくて手狭だった。

別府市長脇 鉄一氏の奔走で、当時の建築規則により十五坪（約五十平方メートル）の別荘を秘書山本節子さんと二人

の名義で併せて三室と四室、都合三十坪足らずの家を建築することにした。

光瑞は、同年十一月、大分を始め、福岡・佐賀・熊本・鹿児島・宮崎等各県を巡回し、知事その他に面接して、産業の復興に助言を与えた。

十二月下旬、別府市鉄輪に新築した別荘に移り居住する。この別荘は当時楠町六にあった料亭「なるみ」の経営者高岸源太郎から提供された鉄輪風呂本の土地に建てた。「なるみ」はふぐ料理で人気があり、皇族、文人、墨客、海軍軍人等の来客で賑わっていた。大谷光瑞上人もたびたび訪れ青物の小魚を所望されていた。

鉄輪の旅館ときわやの当主だった加藤正義は「この別荘は光瑞猊下(げいか)自身が設計されたもので、屋根は二重造り、床下は物置などに使用のため高くしていた。そのため、この家は冬暖かく、夏は涼しかった」と述懐していた。

部屋には敷物もなく、寝台二個と所見用の大机があるきりだった。これはかつてベルギーで光瑞自身が大地図の書見用に特別に注文して製作させた自慢の机で、京都に置いてあったものを取り寄せて使用されていた。

昭和二十三年（一九四八）になって、光瑞は脇 鉄一別府市長から「観光都市のあり方について御高見を拝聴したい」と頼まれ、市議会堂で一時間ほど講話を行った。

講話の内容は、第一には「べっぷ（別府）市」は外国人にとって発音しにくいので、「はやみ（速見）市」に替えた方が良いという意見を述べられた。第二には日出町や湯布院を合併して、大型船が寄港できる港を日出町につくるという大観光都市建設の構想である。

光瑞上人はその頃はかなり健康がすぐれず小用が近くなっていたのだが、講話の後で「よく一時間も中座しないでしゃべれたよ」と側近下瀬泰蛾賛事（豊後高田組、三光寺住職）に話しておられた。

四月には公職追放令によって追放される。これは光瑞上人によるこれまでの著作が関係していた。

夏頃、香川県からオリーブの苗を取り寄せ、国東半島に移植している。

光瑞鏡如上人は、昭和二十三年（一九四八）十月四日には危篤状態になられ、翌五日夕刻に鉄輪風呂本の別荘にて遷化（死去）された。享年七十三歳である。遺骨は別府から船便で関西へ向い、船中では生花が飾られた。

同年十月八日、京都の大谷本廟で葬儀が営まれた。諡(おくりな)は

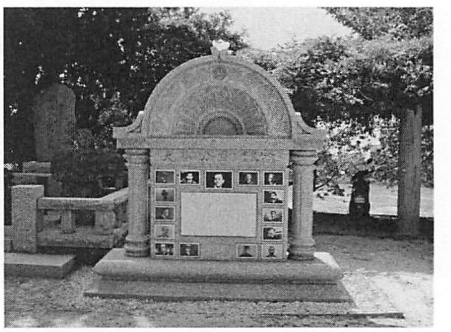
信英院という。

大分県の国東半島出身の升巴陸龍が光瑞上人の許で活躍していた。明治十五年（一八八二）、大分県西国東郡岬村（現豊後高田市）、長泉寺に生まれる。光瑞上人の薫陶を受け、側近として仏蹟巡拝記編纂係、教学参議部出仕、海外随員を歴任した。明治三十七年（一九〇四）二十二歳のときには関東別院（中国東北部大連）初代輪番に任ぜられた。大正八年（一九一九）、三十七歳にて死去した。遺品は別府市北浜の別府別院内の大谷記念館（二階）に収蔵されている。

五、大谷公園と瑞光寺大谷会館

平成五年（一九九三）頃までには、別府市鉄輪の旅館ときわやの庭に加藤正義が建てた「光瑞上人記念之家」と書かれた小さな石碑があった。

光瑞が使用していたステッキは先端に金具がついた竹製で、長さが一メートル、目盛りがついていて、水深、道路幅、建築物や土地の測量などに使用していた。このステッキは光瑞上人が遷化されたのち、料亭「なるみ」の高岸源太郎に贈られた。「ときわや」の加藤正義の話では、光瑞猊下の身長が一八二センチ、体重が八十三キロもあったため、倒れた際あごに支えないように、長さ二メートルのステッキも用いていたという。


大谷公園内　平成10年光瑞上人50年忌に建立

鉄輪風呂本の別荘は、「大谷記念館として鉄輪に残して置くよう」脇鉄一別府市長始め旅館ときわやの主人加藤稱司（正義の父）らが本願寺に陳情したが、かなわなかった。その建物は昭和二十四年（一九四九）七月、解体されて北浜の本願寺に移された。

鉄輪の別荘跡地は、この年、高岸源太郎が別府市に寄贈して、現在「大谷公園」として別府市が管理している。当時鉄輪の住民達が別府市に陳情して「この土地を高岸氏から寄贈してもらい公園用地としたい」と申し出てきた。源太郎はこの土地については他にも考えもあったのだが、地区住民の申し出を受けることにした。条件としては「別府市が公園以外の目的に使用する場合は高岸家に返還される」というものであった。

公園内北側の別荘跡地には、昭和二十五年四月に「光瑞上

人遷化之処」と記された大きな石碑が建てられた。この石碑の立石者は料亭「なるみ」の経営者高岸源太郎で、賛助者は別府市長脇鉄一、加藤稱司、石川克太郎の三名、碑の文字は当時鉄輪の旅館「ときわや」の離れに在住の南画家で、田能村竹田、帆足杏雨の流れを汲む甲斐虎（虎）山画伯の書になる。

甲斐虎（虎）山は日本画家。大分県生れ。通称を駒蔵。帆足杏雨に学び、門下の名手として名を馳せる。京都に私立文中園女学校を創立、教導にも当たった。昭和三十六年（一九六一）歿、享年九十四歳。

「なるみ」の主人、高岸源太郎は石碑等の建設に対して殆どの費用を自分が負担しているにもかかわらず、数名の名前を列記するという奥ゆかしさがあった。

石碑の正面には、第二十一世大谷光照前門主（勝如上人）の筆になる「光壽」と掘られた香炉台が据えられた。光照前門主は光瑞上人の弟、光明の長子であるから、光瑞の甥にあたる。

光瑞上人遷化の石碑の左手北側には「高岸源太郎翁頌徳碑」の石碑がある。

高岸源太郎翁頌徳碑

花田大五郎（大分大学学長）

碑　文

翁は明治十年福井県南中山村に生る。壮年別府市に住居を構え、「なるみ」を経営して大いに名を成す。別府の宣伝と公共事業に尽くすこと数十年本公園土地も亦翁の寄贈によるものなり。

四百七十四坪　高　岸　源太郎

二百八十余坪　同　盛　雄（筆者注、二代目女将）

昭和二十六年二月、七十五歳にて幽界に入る。

翁の功績を記念する為に有志相謀り本頌徳碑を建立す。

昭和三十五年二月

建立委員長　宇都宮　則　綱

外　八　名

加　藤　稱　司

右記録す。

と記されている。

なお、これ以前に大谷公園の北側に隣接する地区公民館及び消防団の敷地も源太郎の寄贈によるものである。

最近、大谷公園が整備され、住民たちの利用が増加している。また、鉄輪温泉湯けむり散歩の集合、出発地点となっていて賑わっている。

大谷公園南側の小川（平田川）を隔てた隣接地は、当時広島の寿司屋「四斗平」経営者首藤氏所有の畑であったが、昭和三十年（一九五五）秋には大谷光瑞還浄地「瑞光寺大谷会館」（現別府市御幸三組）が建設された。

この瑞光寺大谷会館（現住職、谷 文学氏）の二階には光瑞鏡如上人の遺品や写真が展示されている。光瑞上人が使用されていて、遷化のさい脇 鉄一市長に贈られた両袖机が、現在大谷会館にある。また上人は付き餅が大好物であったので、当時使用されていた石臼も残されている。

六、別府別院と大谷記念館

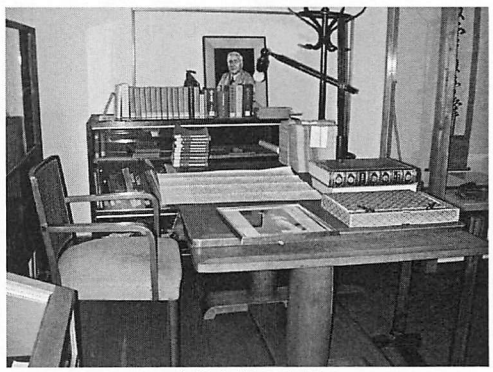
昭和二十三年（一九四八）十二月、光瑞鏡如上人の分骨が京都の本願寺から別府教堂（昭和二十四年三月に別府別院に昇格）に届けられ、現在別府市北浜の別院境内の納骨堂中央に安置されている。

光瑞上人が当時鉄輪で住居されていた別荘は、翌年の昭和二十四年七月、北浜の本願寺別府別院の境内、本堂北側に移転され、大谷会館となった。この建物は、五十年を経た平成二年（一九九〇）秋に取り壊された。

現在、別院境内にある新しい大谷会館は納骨堂の左側の二階部分にある。ここには大谷家から別府別院に下付された光瑞鏡如上人の遺品と写真、書籍等が数多く展示され、上人が愛用していたベルギー製の大机も安置されている。

別府市亀川の西光寺の高橋篤法（あつのり）住職と日出町豊岡の覚正（かくしょう）寺の掬月誓成（きくづきせいじょう）住職の二人が、別府別院の大谷記念館を研究テーマとして「大谷探検隊の業績を通して、光瑞上人の姿を考えたい」と活動している。その後、大谷光瑞上人に関する講演会が別府市に於いて数回開催された。

平成六年（一九九四）には、高校用教科書にも白須浄眞著



大谷会館の内部

になる「大谷探検隊」が取り上げられている。

七、大谷探検隊将来品

探検隊の何人かは日記を書いている。出土品に関する詳細な記述はないが、重要な記録が記載されていることがある。また、日記には探検の写真や植物標本が一緒にあり、現在は龍谷大学図書館がこれらを保管している。

大谷コレクションの主な所蔵地

- 中国の旅順博物館：トルファン採集の仏典断片が一六、〇三五片、非漢語文献や美術品など。
- 中国歴史博物館中国コレクション。
- 中国国家図書館：旅順博物館から移管した六二一点の巻子形敦煌入手経典。中国コレクション。
- 韓国国立中央博物館：壁画などの美術品が約二〇〇〇点。
- 日本では、龍谷大学、東京国立博物館、京都国立博物館、その他の博物館や図書館にも大谷探検隊の収集品が収められている。

大谷探検隊の将来品の研究家に東京都八王子市在住の大学の先生、片山章雄氏がおられる。

引用参考文献

『鏡如上人年譜』　昭和二十九年　京都本願寺

『世界の人間像』　十一　昭和三十八年　藤本光城著　角川書店

『ある市長のノート』　昭和三十九年　脇　鉄一著　脇事務所

『大谷探検隊』　一九六六　昭和四十一年　長沢和敏著　白水社

『大谷光瑞』　昭和五十年　杉森久英著　中央公論社

『本願寺別府別院誌』　昭和六十二年　本願寺別府別院

『大分合同新聞』　平成四年十月十二日

『大谷光瑞』　歴史と旅　平成五年　駒　敏郎著　秋田書店

『別府史談』　第七号　平成五年　矢島嗣久

『別府なるみ創業者』　高岸源太郎傳　平成十二年　矢島嗣久著　発行人高岸克郎